中高生の高齢者介護・福祉分野へのイメージと社会貢献意識との関係性の研究

朝倉　和子　　西口　守　　千葉　一博

本研究では身近に介護職を持つ層と持たない層の違いに着目しながら、高齢者介護・福祉分野に対するイメージと社会貢献意識について中学生（100人）にアンケート調査と高校生（5人）に対しインタビューを実施した。中学生のアンケートはクロス集計を行い、統計的解析にはχ^2検定を用いた。高校生のインタビューはその内容から重要と思われる概念の生成とカテゴリー化を行った。中学生アンケートでは“介護職に就きたい”“親や知人が介護の仕事に反対する”といった設問で 身内の介護職の有無で有意性が見られたが、多くの設問で有意性は見られなかった。高校生インタビューでは身内の介護職の有無に関係なく介護職は社会貢献の高い職業と認識されており、また“自分が長く続けられる仕事”を進路選択の基準にしていた。介護業務や高齢者の実態を正しく伝え、長く続けられる仕事としてイメージ可能な体制整備が介護職への進路選択を高めることが分かった。

キーワード：中高生　介護職イメージ　社会貢献意識　進路選択　介護職家族

1. 目的

現在、我が国において高齢者福祉・介護施設を中心に深刻な福祉･介護人材の不足が続いている。財団法人介護労働安定センターの調査[1]によると平成26年度の従業員の過不足についての回答は、大いに不足（6.4％）、不足（21.8％）、やや不足（31.1％）、適当（40.2％）であり、半数以上の介護事業所が従業員不足の状態だとしている。従業員不足の理由は“採用が困難である”との回答が72.2％であり介護業界が深刻な採用困難な状況であることが分かる。将来的にも介護人材不足の問題は深刻であり、平成37年では約30万人の介護人材不足が推計されている。この様な介護人材不足の一因には、介護職は低賃金であり労働条件が悪いと言う社会的な介護職へのマイナスイメージがある。しかし、一方で介護職は社会貢献度の高い職業として認識されているもの事実である。内閣府の行った平成22年度世論調査での「介護に対するイメージ」[2]の回答結果は①夜勤などがありきつい仕事65.1％②社会的に意義のある仕事58.2％③給与水準が低い仕事54.3％④やりがいのある仕事29.0％⑤自分自身も成長できる仕事18.0％⑥将来に不安がある仕事12.5％であった。介護職は業務内容や給与面に関するマイナスイメージが高い割合にあるが､社会的意義の高さや、やりがいのある仕事としてのイメージも同様に高い割合である事が分かる。

また、社会貢献意識について見てみると、内閣府の平成26年度世論調査おける「社会意識に関する調査」[3]では、“日頃、社会の一員として何か社会のために役立ちたいと思っているか”との問いに全体で65.3％、20代では64.4％が社会の役に立ちたいと回答している。本研究ではこの社会貢献意識の高さと介護職への“社会的意義の高さ”“やりがいのある仕事”といったイメージに注目し、介護人材不足の原因や人材の充足方法について考察することを目的とした。

具体的には人材不足の解消には若い年代層の人

東京家政学院大学現代生活学部人間福祉学科

材発掘が必須であることから次世代を担う中高校生への社会貢献の意識と高齢者介護・福祉分野に対する調査を実施し、彼らの社会貢献意識と職業観そして介護職に抱いているイメージと彼らの進路選択が介護職へ繋がりづらい理由を明らかにする。さらに、家族等身近な介護従事者がもたらす影響にも注目し、介護従事者が家族にいる層といない層における比較を行い、介護職への進路動機の普遍性（誰もが抱く動機の部分）とその反対の個別性（特別な経験に関係する動機）の関係性を明らかにする。

（株）日本総合研究所[4]によると、都道府県による介護人材推進のための取り組みは、「職場見学・体験の開催」に続き「小中高生への啓発事業」が上位を占めた。次世代への積極的な呼びかけの重要性を表している。しかし、介護人材不足解消への効果的な方法は見いだせていない。中高生への調査から介護職に対するイメージ形成のあり方と就職意識を把握することによって、彼らの社会貢献意識と介護職の乖離を縮める媒介項の見出しを試み、介護人材確保への新たな戦略構想へのきっかけとする。

なお、本研究は平成27年度東京家政学院大学における若手研究者研究費助成による研究である。

２．研究方法

２－１　調査対象者・実施期間・データ収集

本研究は中学生のアンケートと高校生へのインタビューの結果を中心とした量的調査と質的調査を基盤としている。中学生と高校生に調査を行った理由は次の通りである。中学生はまだ介護職について大きなバイアスが掛かっていない年齢であると推測し、介護職や自身の将来像に対する率直な意識を確認するためである。一方で高校生は自身の将来を具体的に決定する年齢であり、介護職に対しても様々な情報を見聞きしイメージ化が出来ていることから、そのイメージが高校生の進路選択に与える影響を確認するためである。また、年代の異なる世代に調査を行うことによって時系列的な把握も可能であると考えた。

1）中学生アンケート・量的調査

都内中学校に協力を依頼し、平成27年12月に中学生へのアンケートを実施した。回答者は中学1年生29名､2年生37名､3年生34名の計100名、有効回答数は介護職の身内の有無について回答があったものとし98名であった。アンケート内容は介護職や高齢者についてのイメージが中心であるが、社会貢献意識の有無、身内の高齢者の有無、身内の介護職の有無が介護職へのイメージにどの様な影響を与えるのかを把握する質問項目とした。回答方法は①そう思う②少しそう思う③どちらでもない④あまり思わない⑤まったく思わない、の5段階から選択してもらった。アンケートを巻末に示す。なお、アンケートを実施した際は冒頭に中学校名、末尾に著者連絡先を表記したものを使用した。

表1は回答者の属性である。

表1　中学生アンケート回答者属性

学　年			身内に介護職			m/f		
1年	2年	3年	有	無	不	m	f	不
29	37	34	27	71	2	46	46	8

※表中の「不」は不明な回答を意味する。　単位：人

2）高校生インタビュー・質的調査

A県内、県立高等学校に協力を依頼し高校生へのインタビューを実施した。調査対象者は家族に介護職関係者を持つ生徒3名と持たない生徒2名の合計5名（全員高校3年生）である。授業時間の関係から3名（介護者無2名､有1名)､2名（介護者有）のグループにて実施した。インタビュー時間は共に約60分であった。実施は平成28年1月、生徒の所属高等学校内教室にて実施した。インタビュー形式は、インタビューガイドを使用した半構造インタビューである。インタビューガイドの設問を中心に高校生に自由に語ってもらった。インタビュー内容は録音し逐語録として記録化した。調査対象者の属性とインタビューガイドを表2、表3に示す。

質問内容（インタビューガイド）は、高校生の社会貢献意識、進路選択要因、介護職のイメージについて把握することを念頭に設定をした。また、

表２　高校生インタビュー調査対象者

	身内に介護職	希望進路	祖父母同居	m/f
A	無	薬学系	無	m
B	無	調理系	無	m
C	有（母親）	看護系	無	m
D	有（母親）	スポーツ系	無	f
E	有（兄）	整備士	有	m

＊Ａ～Ｅ高校３年生

表３　インタビューガイド

1）介護の仕事をしたい、してもよいか。
2）介護職に関連するイメージについて。
3）自分の進路について（希望進路・相談者）。
4）社会や人の役に立ちたいか（社会貢献意）。
5）社会や人に役立つ職業のイメージについて。

1）介護職の仕事をしたいか、してもよいかの設問は、介護職を選択しない場合でもその理由と、何が改善されれば介護職を選ぶのかを把握するために全員に聞いている。

２－２　分析方法

中学生へのアンケート調査はクロス集計を行い、統計的解析には χ^2 検定（有意水準5%）を用い、介護職の家族の有無と各設問の関係性を明らかにすることを試みた。また、各設問のアンケート結果についても回答結果を%化しその度合いを介護職の家族の有無における差に注目しながら、その傾向について考察を行った。無回答については χ^2 検定では欠損値とし、%化では不明と扱った。

なお、χ^2 検定では期待度数が小さすぎる場合は回答結果を合併した。また、介護職の有無と各設問が統計的に独立であることを「有意性が見られない」とした。

高校生へのインタビュー（質的調査）の分析は修正版グラウンデッド・セオリー（M-GTA）を用いた。その理由はGTAがヒューマンサービス領域の研究、さらに研究対象としている現象がプロセス的な特性を持っている場合に適しているとされているからである（木下）[5]。介護職はまさにヒューマンサービスであり、高校生の介護イメージや進路決定の形成過程（プロセス）の把握に適した方法であると考えた。そして、インタビュー調査から得られたデータからコード作成、概念の生成、カテゴリー化をすることにより高校生が実際に抱いている介護職へのイメージ、職業選択の基準を具体的に示すことが可能であると考えたからである。

具体的には、インタビュー内容を①介護職へのマイナスイメージ（につながる）と考えられる語り、②介護職へのプラスイメージ（につながる）と考えられる語り、③社会貢献に関連する語り、④自身の進路に関連する語りの４点を判断基準にキーワードの抽出、コーディングを行った。さらに家族の介護職の有無による違いに留意するため、複数回出現するキーワードを一覧化し、その頻度を比較した。次にコーディングの結果から重要と思われる事項の概念の生成とカテゴリー化を行った。

中学生へのアンケートと高校生へのインタビュー双方の分析結果から現代の中高校生が抱いている介護職のイメージ、進路決定の過程や必要要素、社会貢献意識、介護職従事者家族の影響を明らかにすることを試みた。

２－３　倫理的配慮

中学生へのアンケートについて、依頼先中学校校長に協力を依頼し、校長によるアンケート内容の確認と調整の後、アンケートを実施した。アンケートは無記名とし個人情報の保護に留意した。

高校生のインタビューについて、調査依頼先の高等学校教員に打診の後、正式に高等学校校長へ依頼文とインタビューガイドを提出し調査の承諾を得た。調査対象となる生徒は高校教員に選出をしてもらい、教員より本人へ調査の趣旨の説明の後、本人の承諾を得た。インタビュー当日に筆者から改めて調査対象の高校生に本調査の趣旨と個人情報は守られること、インタビュー内容は録音され、研究データとして分析後に公開されること、インタビューはいつでも中断できること、後日希望があれば内容を確認できることを書面にて説明し同意後に署名をもらった。生徒への説明文書は校長、教員にも提出している。

３．結　果

３－１　中学生アンケート

中学生へのアンケートの各設問結果について介護職の家族の有無（質問７）でクロス集計を行い、統計的解析にはχ２検定（有意水準５%）を用いた後、各設問のアンケート結果について回答結果を%化しその度合いを示した。なお、端数処理のため合計が100%にならないことがある。

重要と思われる介護職へのイメージに関する設問について結果を示す。「　」は実際の設問である。回答は①そう思う②少しそう思う③どちらでもない④あまり思わない⑤まったく思わない⑥未回答・不明である。

1)「あなたは社会や人の役に立ちたいと思いますか」（質問４）

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった（n=97, χ^2=0.117281, p>0.05）。構成比でのクロス集計を表４－１にて示す。

表４－１　質問４あなたは社会や人の役に立ちたいと思いますか（単位%）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	52	33	15	0	0	0	100
介護職無	55	25	11	4	3	1	100
全体	54	28	12	3	2	1	100

2)「あなたは将来“介護の仕事をしたい”もしくは“介護の仕事をしてもいい”と思っていますか」（質問８）

介護職の家族の有無で有意性が見られた（n=97, χ^2=8.823625, p<0.05）。構成比でのクロス集計を表４－２にて示す。

表４－２　質問８あなたは将来“介護の仕事をしたい”もしくは“介護の仕事をしてもいい”と思っていますか（単位%）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	11	22	30	30	7	0	100
介護職無	4	8	35	23	28	1	100
全体	6	12	34	24	22	1	100

3)「介護職はやりがいがある」（質問９－１）

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった（n=96, χ^2=4.122367, p>0.05）。構成比でのクロス集計を表４－３にて示す。

表４－３　質問９－１介護職はやりがいがある（単位%）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	37	22	30	7	0	4	100
介護職無	18	31	27	15	7	1	100
全体	23	29	28	13	5	2	100

4)「高齢者のことが好き」（質問９－２）

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった（n=97, χ^2=2.894662, p>0.05）。構成比でのクロス集計を表４－４にて示す。

表４－４　質問９－２高齢者のことが好き（単位%）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	22	30	37	11	0	0	100
介護職無	21	13	44	17	4	1	100
全体	21	17	42	15	3	1	100

5)「家族に介護職関係者がいると介護職に興味を持ちやすい」（質問９－３）

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった（n=97, χ^2=2.019436, p>0.05）。構成比でのクロス集計を表４－５にて示す。

表４－５　質問９－３家族に介護職関係者がいると介護職に興味を持ちやすい（単位%）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	7	22	44	19	7	0	100
介護職無	13	11	34	27	14	1	100
全体	11	14	37	24	12	1	100

6)「家族の介護をしたことがあると介護職に興味を持ちやすい」(質問９－４)

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった(n=97, χ^2=0.653152, p>0.05)。構成比でのクロス集計を表４－６にて示す。

表４－６　質問９－４家族の介護をしたことがあると介護職に興味を持ちやすい（単位％）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	4	15	41	33	7	0	100
介護職無	11	14	34	24	15	1	100
全体	9	14	36	27	13	1	100

7)「介護職は大変そう」(質問９－５)

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった(n=96, χ^2=0.590694, p>0.05)。構成比でのクロス集計を表４－７にて示す。

表４－７　質問９－５介護職は大変そう（単位％）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	59	15	19	7	0	0	100
介護職無	63	15	13	1	4	3	100
全体	62	15	14	3	3	2	100

8)「高齢者をよく知らない」(質問９－６)

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった(n=97, χ^2=1.168049, p>0.05)。構成比でのクロス集計を表４－８にて示す。

表 4-8　質問９－６高齢者をよく知らない（単位％）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	4	26	41	22	7	0	100
介護職無	21	20	32	15	10	1	100
全体	16	21	35	17	9	1	100

9)「親や知人が介護の仕事に反対する」(質問９－７)

介護職の家族の有無で有意性が見られた(n=96, χ^2=6.779848, p<0.05)。構成比でのクロス集計を表４－９にて示す。

表４－９　質問９－７親や知人が介護の仕事に反対する（単位％）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	0	4	15	19	63	0	100
介護職無	7	4	32	18	35	3	100
全体	5	4	28	18	43	2	100

10)「家族の介護をしたことがあると介護職は避けたいと思う」(質問９－８)

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった(n=97, χ^2=0.847559, p>0.05)。構成比でのクロス集計を表４－10にて示す。

表４－10　質問９－８家族の介護をしたことがあると介護職は避けたいと思う（単位％）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	7	7	44	19	22	0	100
介護職無	7	15	42	15	18	1	100
全体	7	13	43	16	19	1	100

11)「介護の仕事は給料が少ないイメージがある」(質問９－９)

介護職の家族の有無で有意性は見られなかった(n=95, χ^2=3.347834, p>0.05)。構成比でのクロス集計を表４－11にて示す。

表４－11　質問９－９介護の仕事は給料が少ないイメージがある（単位％）

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまり思わない	まったく思わない	未回答・不明	計
介護職有	15	19	48	7	11	0	100
介護職無	25	20	28	11	11	4	100
全体	22	19	34	10	11	3	100

12）社会や人のために役立つ職業のイメージと実際になりたい職業について（自由記述）（質問９－10）

自由記述にて社会貢献が高いとイメージする職業と実際になりたい職業について回答してもらった。社会貢献が高いとイメージされる職業には医者、警察官、教師等が多く挙げられ、介護職は３件挙げられていた。実際になりたい職業は、イラストレーター、料理人、スポーツ選手等多様な職業が挙げられていたが、介護職は１件も挙げられていなかった。

３－２　高校生インタビュー

分析の結果、高校生が抱いている介護職のイメージ、進路決定の過程や必要要素、社会貢献意識、介護職の家族の有無の影響を示すカテゴリーは７つ生成することができた。以後各カテゴリーについて記述する。カテゴリーにはインタビュー内容から抽出した概念とそのデータ（発言内容）を記述する。「　」はインタビューの実際の発言であり（　）は筆者による補足である。

カテゴリー１：介護の業務内容に対する不安

【概念】介護職は“大変”という情報、業務内容の限界（特に医療行為が出来る看護との差）から不安が多く挙げられた。

C「3K ってあるじゃないですか‥きつい、汚い、給料安い。・・大変だし仕事と見合っていないのかなって思う。勤務形態も（大変）」

C「介護士だと医療行為ができないんで･･･ちょっと不十分、限界を感じる」

B「給料面でも・・・病院とかで看護師から（介護士は）下に見られたりとか、上下関係がすごいんですよ・・・」

B「仕事を見ていると“大変”が一番ですね」

C「身近に見ているからこそ大変なこととか聞くんで・・・大変なのかなと一番最初に思いますかね」

E「給料がやっぱり低いんで夜勤をしないと・・・結構働き方もというか・・・」

カテゴリー２：介護職の実態・介護対象者の実像の不認知と情報不足からくるマイナスイメージ

【概念】介護職の実態をよく知らない、高齢者について学ぶ機会の少なさ、介護対象である高齢者の実像をよく知らないといった情報の不足や認知症へのマイナスイメージ、介護に関する報道からくる介護職への不安が挙げられた。

C「あんまり老人ホームに行く機会とかもないじゃないですか。どういう生活をしているのか、とかもわかんないんで」

D「介護という存在がうすい」「他の職業と違ってきっかけ作りが難しいと思う・・・教師ならこういう先生になりたいなとかあると思う」

E「実際にどんなことやっているかわからない･･･どんな感じなのかもわからないで（介護職に）入ろうってのも勇気がいるもんかな」

D「（介護は）とりあえず興味が持てない項目･･･」

D「簡単じゃない。なんか、若い人かな、若い人がヘルパーになって、で、お年寄りの人を罵声浴びせたり。最近はそういうイメージになっちゃいました」

カテゴリー３：介護職は自分には無理だという思いと介護職への適性や資質の重要視

【概念】自信のなさ、介護職への適性、業務内容の大変さ、介護に関する悲観的な報道、介護イメージの固定化が影響している。

A・B「介護イコール汚い・・おむつ交換」

D「おねしょとか、下の世話とかするって（介護職の家族から）聞いたんで、それはちょっと私に難しいかなって思います」

A「テレビでやっているの見ると“こういう仕事はちょっとな”って」

A「介護職について、言うこと聞かないと暴力とかふるったりとか、何かイライラしちゃって･･･そういう面で（自分も）ほんとに殺人とかに走っちゃうんじゃないかとか」

A「今の人は多分コミュニケーション能力があまり（上手じゃない）・・それも原因かと思ったんですけど」

D「ストレスが溜まっちゃって、（虐待など）そういうのやってると思うんですけど。仕事やってるからには、ちょっとそういうのはやめてほしい

です」
E「ちょっと勇気がない。ストレス的なものでちょっと自分がやられそう」
D「資質。なんでそういう人がなるのかな」
D「（介護職は）責任感がないとできないかな」
E「心の準備が必要（他の職業とは異なる）」

カテゴリー４：介護職に対する能動的評価
【概念】介護は素晴らしい仕事、介護職の人は（自分の）仕事に誇りを持っていると思う、介護職はやりがいのある仕事との認識は持っている。
B「（介護職は）素晴らしいと思います。これから高齢化社会になっていくんで、そういう仕事に就いている（人がいる）と、これから先安心だなと思います」
C「人柄として優しい方が多いのかなと思います」
C「（給料が上がれば、介護職を）選びます」
D「やりがいはありそう」「誇りをもっていると思います」
D「（福祉系の進路、介護職に）行く人、それで（介護職に）なれる人はすごいな、って思う」

カテゴリー５：介護職の現状、高齢者（高齢社会）への理解
【概念】介護人材・施設の不足の現状の理解、高齢者への能動的イメージも有している。
D「介護する人も、今、結構若い人が少ない」
E「高齢者で介護している人もいるらしい」
B「高齢者は話し相手としては無限大、ずっとしゃべってくれそうなイメージ」
D「（介護等必要なことに対し）だってしょうがないじゃん」

カテゴリー６：進路決定の要素（興味と継続性）と社会貢献意識の関係性
【概念】自分の興味のある分野、長く続けられる仕事を選択している。興味を持つ“きっかけ”の重要性も挙げられた。自分の決定進路は社会に役立つ仕事だと認識していることが多い。
A「やりがいですね。好きな分野とか・・・」
E「バイトも時給（の良し悪し）で決めると続かない、興味があるから続くと思っている」
C「社会に貢献してるって感じる職業の方が長続きしそう、自分にとってもいい職業だな、と思うんです」
D「（進路は）自分の興味のあることが一番で、それがたまたま社会につながることだったらいいな」
E「人の役に立ちたいっていう気持ちはあるっちゃあるけれども、やっぱり自分がやりたいこともしたいな」
D「（職業）になりたいって思ったのは、実際教わったりしたことがあったんで。そういうきっかけがあったので・・・」
D「きっかけがあれば介護職に興味持つ人も出るんじゃないかなって。そのきっかけが、何だろう」

カテゴリー７：介護職の家族の影響と家族の様子を見ての進路決断（介護職有のみの意見）
【概念】介護職の家族（親やきょうだい）から介護職に就くことを勧められた、反対された双方のケースがあるが高校生は家族の実際の働き方を見て介護職以外の進路への決断をしている。
C「身近に見ているからこそ大変なこととか聞くんで・・・大変なのかなと一番最初に思いますかね」
C「（介護職をしている）親から、介護士になるって言ったら看護師を目指せと言われました」
D「（家族から）おねしょとか、下の世話をするって聞いたんで、それはちょっと難しいかなって思います」
D「（家族に介護職がいることは介護職への進路決定には繋がらない）・・そうですね」
D「（福祉職に進む人は）どういうきっかけがあるのかなって思う」
D「（介護職の家族の）姿見て（介護職には）進みたくないって思ったから」
E「時々、ケガをして帰って来る時がある」

４．考察

まず、中学生へのアンケート結果から見えてきた事項について考察する。

介護職の家族の有無の影響（有意性）から見てみると、多くの設問にて有意性が見られず、全体

として介護職の有無は中学生の介護職のイメージ生成において大きな要因とはなっていなかった。有意性が見られたのは「将来介護の仕事をしたい、もしくは介護の仕事をしてもいいと思っているか」と「親や知人が介護の仕事に反対する」であった。それぞれの回答の内訳を見ると、介護職に就いても良いとする割合は介護職有りで33％（そう思う11％、少しそう思う22％）、介護者無しで13％（そう思う4％、少しそう思う9％）である。家族に介護者がいると介護職への親和性が高いと言え、介護職の家族がいる層は何かしらの影響を受けていることが分かる。家族が介護職を反対すると思うかについては、そう思うが家族の有無でそれぞれ4％（そう思う0％、少しそう思う4％）と11％（そう思う7％､少しそう思う4％）であり、あくまで中学生自身が感じているイメージではあるが、家族に介護職がいると介護職への反対が少ないと感じていることが分かった。一方で、あまり思わない、まったく思わないとの回答が双方において半数を超えていることから、介護職の有無で差異はあるものの、中学生の時点では親からの介護職に対するマイナスの影響は小さいと考える。

「家族に介護職関係者がいると介護職に興味を持ちやすい」「家族の介護をしたことがあると介護職に興味を持ちやすい」「家族の介護をしたことがあると介護職は避けたいと思う」といった介護職の家族の存在や家族の介護経験が、介護職への進路選択に影響すると思うかに関連した設問については介護職の家族の有無での有意性は見られず、その回答も“そう思う”“少しそう思う”はいずれも3割以下であり、中学生自身は介護職の家族の存在や介護経験が介護職への選択に影響するとはあまり感じていないことがうかがえた。

介護職の家族がいる層、いない層共通にそう思うとする回答が多かった設問が「介護職は大変そう」であった。介護職有りでそう思う59％、少しそう思う15％であり、介護者無しでそう思う63％、少しそう思う16％と双方で8割近くを占めている。さらに“そう思う”とする回答が圧倒的に多いのも特徴的であった。

「介護はやりがいがある」という設問については介護職がいる層で“そう思う”37％“少しそう思う”22％、介護職がいない層で“そう思う”18％“少しそう思う”31％と双方の層で5割を占めていた。この結果は介護職に対する社会的評価や重要性は若い世代の中学生にも抱かれていることが分かるが、自由記述の将来成りたい職業に介護職が挙がっていないこと、「将来介護の仕事をしたい、もしくは介護の仕事をしてもいいと思っているか」の設問でも前述の通り、肯定的回答が低い割合となっていることから高校生と同じく自身の進路決定に繋がっていないことが分かる。また、介護職離れの大きな要因と言われる給料については「給料が少ないイメージがある」としたのは介護者はいる層で“そう思う”15％、“少しそう思う”19％、いない層で“そう思う”26％、“少しそう思う”20％と双方とも約4割を占める結果となり留意すべき要素であるが、「高齢者をよく知らない」といった別の要因も同じような回答であり、中学生においては介護職について給料の低さのイメージが突出している訳ではないことがうかがえた。

一方、各設問にて“どちらでもない”との回答が多かったのも事実である。中学生の時点では介護職への具体的なイメージがまだ明確でないこと、さらに介護職に限らず将来の職業像についてもまだ明確でない部分が多い可能性もある。

次に、高校生へのインタビュー結果から見えてきた事項について生成されたカテゴリー毎に考察する。

カテゴリー1：介護の業務内容に対する不安

介護職が家族にいる生徒、いない生徒共通して“介護は大変そう”というキーワードがインタビュー内で多く出てくるが、そこには介護職が可能とされている業務内容と範囲に対する疑問が関係していた。介護職と看護職であれば医療行為が可能である看護職を選択するというケースに象徴されるように、介護職の業務範囲を限界的に感じ取っており、介護職の役割がとても狭い領域で捉えられていることが分かる。業務独占の業務の多さ、それに伴う賃金の差で職種間の優劣を感じていることも分かる。これは、介護職の高齢者施設

等における役割や存在意義が社会的に評価されていないことに原因がある。介護職の専門領域は介護技術ではあるが、利用者の生活の総合的な支援のために幅広い活躍ができることを社会に周知していく必要がある。

カテゴリー２：介護職の実態・介護対象者の実像の不認知と情報不足からくるマイナスイメージ

インタビューから、要介護の高齢者は非常に重度であり介護が大変であるというイメージの固定化が感じられた。高齢者や認知症の実像が正しく把握されておらず、その原因は高齢者や関連施設に関わる機会の少なさであることを本人達も指摘している。さらに高齢者施設等における介護職の待遇に対する報道や介護職員における事件の報道で介護職に対するイメージは“自分はやりたくない仕事”と位置付けられてしまっている。介護職について興味を抱く前にマイナスイメージを強める情報が入ってしまい、介護職や要介護高齢者の実務や実像を見てみようという機会もなくなっている。高齢者と触れ合う機会を増やす、高齢者施設との連携を増やす等現実的な福祉教育への改善も必要であるが、現職の介護職員は何を持ってやりがいを感じているのかをしっかりと社会へ発信し、介護職は多様な側面を有していることを理解してもらうことが最優先の課題である。

カテゴリー３：介護職は自分には無理だという思いと介護職への適性や資質の重要視

介護職は大変そうというイメージが強く見られ、介護職は自分には無理だと思うという意見が多かった。その理由として、ストレスや体力的に無理だとする意見が多かった。介護者がいない生徒は“介護職に就く自信がない”とし、それは、介護関連の報道といった外部からのイメージによるものや自分自身や同世代のコミュニケ―ション能力不足傾向を理由とする不安等、自身を含め同世代への自己評価や自信の低さがあった。一方、介護者がいる生徒は無理だと思う業務内容（排泄介護など）を具体的に挙げたうえで介護職への距離を置いた理由や自身の適性について述べている。さらに、介護現場で起きた事件について、介護職が家族にいない生徒は、状況によっては自分もやってしまうのではないかという怖さを語り、家族に介護職がいる生徒は事件を起こした人物への怒りを語った。これは身近に介護職がいるからこそ、介護従事者の適性や介護従事者としてあるべき姿が明確になっていると言える。

カテゴリー４：介護職に対する能動的評価

介護職の家族の有無に関係なく、介護職、介護従事者に対する評価は高かった。高齢社会、介護人材不足の状況において介護は重要な職業でありやりがいのある職業だと認識している。また実際に介護職に就いている人に対しても重要な職業に就いている人として尊敬をしていた。介護職を家族に持つ生徒は、家族に対し“仕事に誇りを持っていると思う”“やりがいはあると思う”としており、身近に介護職ならではのやりがいや誇りを感じていた。しかし、この様な介護職への能動的な評価は実際に自身の職業選択となると結びつかない現状が見られた。

カテゴリー５：介護職の現状、高齢者（高齢社会）への理解

家族に介護職がいる生徒には、現在の高齢社会における介護人材や施設不足の現状を理解する語りや要介護者についても理解を示す語りがあった。介護業務や要介護者に対する消極的な語りも見られたが、介護職の重要性や要介護者の権利を理解する語りがあり、これらは身近に専門職である介護従事者がいる環境が影響していると考えられる。

介護や高齢者についてのイメージが具体的でもあった。

カテゴリー６：進路決定の要素（興味と継続性）と社会貢献意識の関係性

介護職が家族にいる生徒、いない生徒共通に職業選択の基準としていたのは「長く続けられる仕事」であり「自分の興味があるもの」であった。アルバイト等の経験から自分に向いている職業は何かを冷静に考察していた。

社会貢献の意識は生徒間で多少の温度差は感じ

られるものの、働くのであれば社会に貢献したいと考えており、社会貢献が実感できそうということも職業選択の要素になっていた。

介護職の有無に関係なく、高校生には介護職は社会貢献度が高い職業であるとイメージされていたが、「長く続けられる仕事」「自分の興味があるもの」として捉えられていない現実があった。「長く続けられる仕事」の条件には「自分の興味があるもの」も含まれるが、高校生が興味を抱ける様な“きっかけ”が介護分野には無いと感じていた。その理由には身近にその職業に就きたいとも思わせるモデルがいないこと、福祉関連の教育でも介護や高齢者の事があまり触れられていない印象を高校生は抱いていた。体験等を通じて介護職を具体的に理解して貰えるよう、介護職への興味を抱く機会（きっかけ）を多く提供していくことが重要である。

カテゴリー7：介護職の家族の影響と家族の様子を見ての進路決断（介護職有のみの意見）

介護従事者が身近にいる生徒は介護職の様子を身近に見る機会が多く、介護職が身近にいない生徒より介護職について具体的なイメージを有していた。しかし、介護職をやりがいのある仕事、重要な仕事と認識しながらも自分自身にとってやりがいのある仕事とは捉えられていない。その理由は、やはり興味が持てない、長く続けられる仕事ではないという意識からである。また、介護従事者の家族の様子を見て、介護職以外の職業を選択したケースもあり、身近な介護従事者が常に介護職へのイメージについて能動的な役割を果たしているとは言えなかった。さらに、介護職の家族から介護職を勧められたとするケースと他職種（看護職）を勧められたとするケースがあり、介護現職者においても自身の職業に対し評価が分かれている実情も伺えた。一般的に介護従事者が身近にいるとその影響で介護職へ進みやすいと思われがちであるが、職業に対する親和性や理解と現実的な職業選択は必ずしも連動しないことが分かった。

5．結論

中高生や大学生を対象にした介護職への就労意識に関する先行研究において、家族や身内に介護従事者が存在すると介護職就労への関心が高くなることが挙げられている（藤沢、吉村）[6), 7)]。今回の中学生や高校生における調査においても、介護従事者が家族にいる層の方が、介護職就労への関心が高い傾向があることが確認できた。だが、今回の調査では家族における介護従事者の存在が介護職や介護に関連するイメージの形成に大きく影響しているとは言い切れない結果が多く見られた。事実、中学生への介護職へのイメージに関するアンケートでは介護従事者の有無で回答に有意性が見られた設問は限られていた。高校生へのインタビューでも介護従事者の家族からの目立った能動的な影響は見られなかった。介護従事者がいる層の方が、介護職の現状を具体的にイメージできているのは確かであったが、そのことが介護職を選択する理由になるとは一概には言えず、介護人材不足の解決策を考える時、介護従事者が家族にいるという特殊性を持つ層にばかり頼るのではなく、普遍的な対策を講じる必要性があろう。

介護職へのイメージで最も顕著であったのが「介護職は大変そう」というものであった。介護従事者の有無に関係なく、高校生のインタビューにおいても非常に強調されていた要素であり、中学生のアンケートでも8割近くの回答が大変だと思うと回答していた。社会的に介護＝大変というイメージが作られていることも一因と考えられるが、高校生のインタビューで介護従事者のいる生徒は実際に家族の働き方を見て“大変である”と認識しており、介護職とは異なる進路を選択していた。介護従事者である家族から介護職を反対されたケースもあり、現職の介護従事者が自身の職業に自信を持てるような環境づくりも重要である。

介護職離れの大きな要因とされている“給料の低さ”については、平成25年の常勤労働者の平均年齢、勤続年数及び平均賃金は、福祉施設介護員は21万8.900円（平均年齢38.7歳・勤続年数5.5年）であり、サービス業は27万3.600円（平均年齢44歳・勤続年齢8.8年）、看護師32万8,400円（平均年齢38.0歳・勤続年数7.4年）[8)]であることから、他業種と比較し賃金が低いことは事実である。中学生アンケートでも給料が低いと思うと回答する

割合は介護従事者の有無の双方の層において約4割を占めることから留意すべき事項ではある。しかし、短期大学における介護職を目指す学生と目指さない学生の介護職の希望の有無と給料の関係を示した調査において、“介護職は給料が安い”と回答したのは介護職を目指す学生が63％、目指さない学生が40％であり、“介護職は給料が安い”とのイメージは介護職を目指さない理由と大きな相関関係がない可能性が示されている。そして、必要なのはその職業に「やりがい」を感じられることだとしている（吉村）[9]。（財）社会福祉振興・試験センターによる現介護従者に対する調査においても、介護施設へ入職時に現在の職場を選択した理由は「やりたい職種・仕事内容」39.7％、「通勤が便利」38.2％、「能力や資格が活かせる」34.2％であり、「賃金の水準が妥当」は11.7％であった[10]。介護職離れは賃金水準のみの問題でなく、介護職における“やりがい”を如何に具体的に中高生たちに提示できるかが重要となる。

介護職は“やりがいのある仕事”“社会の役に立つ仕事”と介護従事者の有無に関係無く評価されている。中高生の社会貢献意識も高く、社会の役に立ちたいと言う意識はあるが、介護職に対する評価は中高生の実際の職業選択には結びついていない。進路選択の重要な要素は“長く続けられる仕事（継続性）、自分の興味がある仕事（共感）”であることがインタビュー内で挙げられていたが、この継続性と共感を有する職業として介護職は認識されていない現実があった。介護職に対する業務内容イメージの固定化も見られ、業務範囲の限界を感じさせていることから介護職は継続性や共感のある職業として認知されづらい。介護職には利用者の生活をトータルに支援する存在として介護業務以外の価値をつけていく必要性がある。

6．まとめ

中高生たちのアンケート調査とインタビューから、見えてきたことは、介護職は社会貢献の高い仕事、やりがいのある仕事と評価されながら、その評価はあくまで人がやりたがらない仕事や自分にはできない仕事を職業としているからであり、具体的な介護職におけるやりがい伝わっていない現状であった。介護職は存在が薄いという語りもあったが中高生にとって介護は身近に感じられていない。この溝を埋めていくためにも中高生に対して介護職ならではのやりがいや社会貢献について施設や自治体共同で積極的にアピールしていくことが必要である。今回インタビューに協力してもらった高校生5人の中に介護職に就こうとする生徒が1人もいなかったこと、中学生アンケートにおいて将来なりたい職業に介護職が1件も挙げられなかったことは重い事実として受け止めるべきであろう。

今後の課題として実際に介護職を選択した生徒が介護職を選択した理由とその過程に着目したインタビュー調査を考えること、アンケート調査においては各設問の結果の特性についてさらに着目していく必要性がある。そして介護施設における介護職のやりがいと、そのアピール方法について介護職従事者と共に検討をしていきたい。

謝辞

今回の研究を進めるにあたり、ご協力いただきました皆様に深く御礼を申し上げます。そして、さらなるご指導を引き続き賜りたくお願いを申し上げます。

文献

1）公益財団法人介護労働安定センター『平成26年度介護労働実態調査』、2015年
http://www.kaigo-center.or.jp/report/　2016/3/1.
2）内閣府大臣官房政府広報室「介護保険制度に関する世論調査」『平成22年度世論調査』、2010年
http://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-kaigohoken/2-3.html　2016/3/1.
3）内閣府大臣官房政府広報室「社会意識に関する調査」『平成26年度世論調査』、2015年
http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-shakai/index.html　2016/3/1.
4）株式会社日本総合研究所『平成25年度老人保健事業推進費等補助金　老人保健健康増進等事業　介護材確保の推進に関する調査研究事業報告書』、2014年

https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/column/study/pdf/7444.pdf　2016/3/1.
5）木下康仁『修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析方法』富山大学看護学会誌第6巻2号、1-10頁、富山大学、2007年
6）藤沢緑子『介護の仕事に対する高校生の意識』日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要第17号、23-32頁、日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学、2012年
7）吉村浩美『学生たちへのアンケートから見る介護の課題と方向性』永原学園佐賀短期大学紀要（39）、87-96頁、佐賀短期大学、2009年
8）厚生労働省『平成25年賃金構造基本統計調査』、2014年
http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2013/　2016/3/1.
9）前掲書7）
10）財団法人社会福祉振興・試験センター『平成24年度社会福祉士・介護福祉士就労状況調査』、2013年
http://www.sssc.or.jp/touroku/results/index_sk.html　2016/3/1.

（受付　2016.3.23　受理　2016.7.11）

介護職に対する意識アンケート

今回は、■中学校の生徒のみなさんに“介護職（お年寄りが生活する施設等で専門的に働く人たちなど）に対するイメージ”をお聞きします。難しく考えず、答えられる範囲でお答えください。

このアンケートの結果は、大学における研究の資料とさせてもらい、集計のうえ、学会発表や報告書等にて発表されますが、みなさんのことが特定されること（誰が答えたかなど）はありませんのでご安心ください。

****

質問１　あなたの学年と性別に番号に〇をしてください。

学年　1）中学１年生　　2）中学２年生　　3）中学３年生　　性別　1）男性　　2）女性

質問２　あなたはおじいさんやおばあさんと一緒に住んでいますか？

1）おじいさんやおばあさんと一緒に住んでいる。（どちらか１人でも一緒に住んでいれば、1）に〇をしてください。）

2）おじいさんやおばあさんとは一緒に住んでいない。

質問３　将来の進路（将来なりたい職業など）について誰に相談をしていますか？もしくは誰に相談をしたいですか？　あてはまる人全てに〇をしてください。

1）お父さん　　2）お母さん　3）お父さん、お母さんの両方　4）おじいさんやおばあさん 5）きょうだい

6）学校の先生 7）塾や習い事の先生　8）学校の先輩　9）友達　10）その他（　　）

質問４　あなたは社会や人の役に立ちたいと思いますか？

1）そう思う　2）少し思う　3）どちらでもない　4）あまり思わない　5）まったく思わない

質問５　社会や人のために役立つ職業としてイメージする職業を自由に記入してください。『　　』

質問６　あなたが今、実際になりたい職業を自由に記入してください。『　　』

ここからは介護職（お年寄りが生活する施設等で専門的に働く人たちなど）に対するイメージをお聞きします。

質問７　家族や身近な人に介護関係の仕事をしている人がいますか？どちらかに〇をしてください。

（特別養護老人ホームやデイサービスセンター等で働いている人等を指します。）　　1)はい　　2)いいえ

※次の質問からは各設問にある１～5 に当てはまる数字に〇をしてください。

数字は「1 そう思う、2 少しそう思う、3 どちらでもない、4 あまり思わない、5 まったく思わない」を意味します。

例）質問：あなたはテレビを見るのが好きですか。答え：そう思う　①　2　3　4　5　　←1 に〇をつけます。

質問８　あなたは将来“介護の仕事をしたい”もしくは“介護の仕事をしてもいい”と思っていますか？

1　2　3　4　5

質問９　介護職（お年寄りが生活する施設等で専門的に働く人たち）と介護に関連する事柄へのイメージについてお答えください。答え方は問８と同じです。

1）介護職はやりがいがある。	1	2	3	4	5
2）高齢者（おじいさんやおばあさん）のことが好き。	1	2	3	4	5
3）家族に介護職関係者がいると介護職に興味を持ちやすい	1	2	3	4	5
4）家族の介護をしたことがあると介護職に興味を持ちやすい。	1	2	3	4	5
5）介護職は大変そう。	1	2	3	4	5
6）高齢者を良く知らない。	1	2	3	4	5
7）親や知人が介護の仕事に反対する。	1	2	3	4	5
8）家族の介護をしたことがあると介護職は避けたいと思う。	1	2	3	4	5
9）介護の仕事は給料が少ないイメージがある。	1	2	3	4	5

10）その他（自由に記述してください。）

質問は以上で終わりです。ご協力いただきありがとうございました。

東京家政学院大学現代生活学部人間福祉学科　朝倉和子（あさくらかずこ）電話■■■■■■■■■■（直通）